

渡辺克己著



第二章●竹町かいわい

## 第二章 ● 竹町かいわい

【写真】 大正末年の竹町

- ・ しにせを誇る竹町
- ・ 座売りの店先
- ・ 駆けるガス灯屋
- ・ デッチ生活
- ・ 二の日の縁日
- ・ あの店この店
- ・ 奇人ユウケンさん
- ・ 竹町っ子

奥付け／デジタルブックについて



### 発行に当たって

▽この電子ブック「大分今昔」は昭和 37 (1962) 年 11 月から翌 38 (1963) 年 12 月末まで、1 年 2 カ月にわたり大分合同新聞に 295 回連載され、連載から 20 年後の昭和 58 (1983) 年大分合同新聞文化センターで書籍として出版されたものを、電子ブックとして再編集したものです。したがって、文中の「現在」とか「いま」というのは昭和 37、8 (1962～63) 年当時のことです。

▽使われている町名も、その後、街区制の変更によって連載当時とは変わっており、その場所を知る手がかりになる建物も、いまでは移転したり、なくなったりしているものがあります。このため、おもなものは各章の終わりに「注」として、昭和 58 (1983) 年現在の町名、場所を説明し、わかりやすくしています。



大正末年の竹町一丁目入り口

## しにせを誇る竹町

大分の町でも みそこしや竹だよ ほろろくは土だよ

こんな文句が、いなかの盆踊り歌の中にあつた。いくら大分の町が高い文化を誇っていても、みそこしはやっぱり竹だし、ほろろくは土で作つたものを使つているじゃないか、というわけだ。

いまの若い人には「ほろろく」といっても知らない人が多かろう。豆やアラレをいる素焼の土器で大きいのは直径三十センチぐらいもあり短い柄がついていた。いまの金網製品とちがつて直接火があたらないので、アラレなどはこんがりとふくらんで焼けた。火ばちにかけたほろろくにアラレをつかんで入れ、竹ばしでかきまぜると、ガラリガラリとうつろな音がした。

ところで「大分の町でも…」という、たぶんにせん(羨)望の思いをこめていなかの人々にながめられた大分の町の、文化の中心は竹町付近ということになる。いまは中心街はだいぶ分散してきたが、あのころは、おもな買い物は竹町へと集中した。

いまでこそ電車通りの方から買い物客が集中し、竹町四、五丁目は、はしつこという感じだが、明治から大正中期ごろまでは四、五丁目の方が中心だったからおもしろい。熊本街道が大道から西新町に直線コースをとり、西新町かど付近がその終点だったし、別府通いの客馬車の始発駅はいまのアポロ付近だった。だから、大道、西新町の問屋に荷をおろしたり、取り引きをした次には、竹町の買い物という順となる。客馬車の乗降客

も四、五丁目に集まった。あのあたりで最もしにせを誇っている菊川漆器店など、最初西新町に店を張っていたが、竹町五丁目が絶好の地として明治の末に、つるや呉服店がつぶれたあとを買って移ったのである。

そのときの買い値が、家屋を含めて百四坪の土地が七千五百円。当時竹町かいわいでは最高の買い値と評判されたという。先々代が竹町進出にあたって将来の地の利を考えたわけだが、時の流れは町筋の盛衰地図をぬりかえた。

明治時代に西新町から竹町へ移った店は菊川のほかにも何軒かあった。

それには町筋の格といったようなものも関係していたらしい。がんらい西新町は問屋町として繁盛しているので比較はむりなはずだが、竹町には「値切らずに買える」という客の信頼の高さがあった。それだけ竹町商人は誇りを持っていたのである。

## 座売りの店先

竹町にかぎらず、明治から大正中期ごろまでは、商店はたいてい座売りであった。座売りというのは店頭は広い畳敷きで、店の者は、きちんとすわって客に応対し、客はせまいケコミ（土間）から横ずわりに畳に腰かけて、店の者がひろげる品物をあれこれ物色するやりかただ。

いまの若い人も、映画の時代劇で見ているから、だいたい想像はつくだろう。

帯を手にする女性（挿絵：田中 昇）



その奥の方に、すわると胸から上ぐらいが見える格子でかこった一画があり、ここが帳場で、主人がすわっていた。この一画を「ケツカイ」と呼んだ。どんな字を当てるのか辞書を調べたら「結界」とあった。

「結界」というのはがんらい仏教語で、お坊さんが仏道修業に障害のないよう一定の地域を定めて、衣食住などに制限を加えること、またその場所をさすものだ。これが商店の帳場をもさすようになったのはおもしろい。たぶんデッチなどの立ち入りは、きびしく禁止された主人の座、つまり商店では神聖の座だったのだろう。

座売りは客が横にならぶわけだから店の奥行きはいらない。そのかわりなるべく間口の広い方がいいわけだ。そこで店の規模は五間間口とか、七間間口の店などと呼んだ。その広い間口の、低い軒にそって、ずうっと黒いのれんがかけてあった。そののれんには店の屋号を染めぬいてある。店名を表示したものはこののれんと、軒につるした石油ランプ入りの「ガス灯」と

称した街灯ぐらいなもの。  
店頭ののれんが姿を消して、看板がそれにかわったのは大正になってからである。

だから店の中は、深いのれんに光りをさえぎられて薄暗かった。客は反物の柄などをよく見ようと思え

ば、のれんの外に持ち出してながめるのであった。腰をかがめてのれんから半身を外に出し、手に広げた反物をしげしげとながめている日本髪の婦人の姿。そんな姿が想像できれば、明治の竹町商店街の買い物客風景が浮かびあがる。

夕方になると、はち巻きに腹がけ、はんでん、黒いパッチをぴつたりはいた、威勢のいい若い衆が脚立を肩に、風のように竹町筋を走り、店先の「ガス灯」に火をつけて回った。

石油ランプのはいった軒灯だが、これをなぜ「ガス灯」と呼んだのか、だれも知らない。

## 駆けるガス灯屋

「ガス灯に灯がはいった」ガス灯屋が駆けてきて、脚立をすえ、すばやく上って軒灯に灯を入れ、そしてまた次の軒灯へと、駆け去っていくと、デッチたちは店内の夜のしたくに忙しくなる。

プチョウをおろして、くぐり戸のところは明り障子にし、店内にはランプをともして夜の客に應對できるようにする。

プチョウとは二枚戸のことで昼間は軒のカモイの中に押し上げてある二枚の戸を柱に刻んだレールにそっておろすと戸締めることができるようになっていた。ほとんどの商家の表戸はこのプチョウだった。

「ガス灯」は、竹町や西新町方面でも、問口の広い大店がつけているぐらいで「ガス灯」を一手に引き受けている会社が、町内のにぎわいのためにつけませんか、勧誘に回っていた。

毎日朝早く若い衆が威勢よくとんできて、前夜来ついている

灯を消し、ホヤを磨いて、石油を入れ足しておく。そして夜また点灯しに駆けてくるのだが、なにしろ日暮れから暗くなるまでの、わずかのあいだに、全市の「ガス灯」に灯を入れてしまわなければならないのだから、若い衆は手分けしてしつ風のように駆け回らねばならない。向こうからガス灯屋が走ってくる通行人は道をあげたものだ。ぐずぐずしていると脚立の先で突きとばされてしまう。

屋号のはいった「ガス灯」がまばらながら両側から道を照らすと、竹町筋のたそがれは深くなる。ときおり通る人のゲタの音や、あんまの笛の音がわびしく流れていく。といった明治風景の詩情は、いまは想像もできない。

ほんとうの「ガス」が引き込まれ、店内に電灯の補助としてガス灯の照明が使われたのは、明治四十四年に豊州ガス会社ができから後のこと。水銀灯の光りにちよつと似たあの青いやわらかい光りは、たそがれのもの悲しさをいっそうつのらせるようだった。

大分町に電灯線が引かれたのはガスより二年前の四十二年で、豊後鉄道株式会社が大大分水電を買収し大野郡の沈墮の滝に五百キロワットの発電所を建設してからだ。そのころから、ぽつぽつ軒灯は電灯にかわっていった。竹町筋に大分県で初めてのアスパルトブロックの舗装工事をするともにスズラン灯をつけて大分ツ子をアツといわせたのは大正中期。

数間おきに鉄柱が建てられ、丸いホヤをかぶった電灯がずらりとアーチ型に並んだ姿は当時繁華街の名に恥じないものだった。このスズラン灯を慕って夜の散歩客も絶えなかった。



## デッチ生活

「昔のデッチ生活はきびしいもんでしたよ」

竹町四丁目かどの阿南洋服店の老主人が、竹町のデッチ生活を話してくれた。阿南さんは明治三十二年から一丸のデッチに住みこみ大番頭までつとめあげた竹町商人。

阿南さんが郷里の石城川（挟間町）から出てきて一丸に奉公したのは十三歳のとき。そのころの一丸は厚子、トンビ、帽子、クツ、肩掛けなどの洋品雑貨をあつかっていた。

荷揚げあたりのおとくいさんから、女中が品物を届けてくれていってくると、コウリに渋紙をはったといったような形のポテに品物をとりそろえて入れ、大ぶろしきで包んで背にかついで出かける。もめんの着物に角帯、前だれ、デッチ時代は冬でもたびをはかせてもらえなかった。ポテから取り出して並べた品物を、奥さんやこどもがあればこれ選ぶのを、きちんと行儀よくすわって待っている。

デッチの少年



デッチの間はお給金はない。盆と正月の年二回のヤブ入りに五銭もらって親元に帰った。お金よりも何よりその二泊三日の里帰りがなにもましてうれしかったそうだ。だから帰郷三日目の朝はきつと腹痛を起こし

た。腹が痛いといえども一日か二日店に帰るのを引き伸ばしてももらえると考えての仮病。もちろん母に見破られてせっかんされ、泣く泣く兄に連れられて店に帰るのだが、竹町に足を踏みこむとしゃんとした。

そのころ室町（竹町二丁目と三丁目の間にあった町筋）に床屋さんがあって、おやじさんがかわいがってくれていた。それで一丸に直接帰らず床屋に寄ってひと休みして、おやじさんの励ましに送られて何くわぬ顔で店に帰った。

店から奥の間までランプの数が二十を越していたが、そのそのうじもデッチのたいせつな仕事。

アカギレの上にまたアカギレができた手をホヤの中に入れてみがくのだが、ちよつと力の入れようが悪いと薄いガラスが破れてしまう。たびたび破ると番頭さんにしかられるので、家からもらってきた小づかい銭で、こつそりホヤ買いに走った。そのホヤ代は二銭。

朝七時の起床から夜十時の閉店まで自分の時間はない。夜、店にすわって客待ちしていると腹がすく。先輩の番頭あたりになると、店の者に口止めして腹ごしらえに店を抜けだした。室町に信濃屋というなわのれんのソバ屋、もち徳というゼンザイ屋などがあった。ソバもゼンザイも二銭ぐらいだった。デッチどもは閉店後銭湯に出かけ、その帰りに立ち寄って食った。その時間にはよその店のデッチたちも集まってきて、盛んに食欲をみたしている。「やあ、お前もきたか」というわけだ。あの熱いソバの味は忘れられなかった。

それにしても昔の竹町の店員は一本の筋がねが通っていた。

## 二の日の縁日

竹町の夜市も近年なかなか盛んになったが、昔のような親しみとか楽しさといったものがなく、なんとなくよそよそしい。昔よりずっと明るくて、きらびやかで商品の種類も多いのに、そのよそよそしさはどこからくるのだろうか。

この夜市が始まったのは、たしか大正十一年の夏から。もと大分銀行の横、いまのタイコウの西側に道幅一間半くらいの露地があった。この奥に宮地嶽神社を勧請してまつり、この神様の縁日が二の日なので、竹町の夜市をこの神さまに結びつけて、二の日を縁日としてふたをあけたのだった。

当時世界的な恐慌の波にあらわれて、不況のどん底にあった商店主たちが、景気づけに考えだしたものだ。

ひとつウンとはでにやろうというので、当時別府に多かったテキ屋を竹町の縁日に招くことになった。そのころは店の間口も広くて余裕があったので店の正面だけを避けて、テキ屋に店を張る場所を与えた。

バナナのたたき売り屋あり、金魚屋あり、おもちゃ屋あり、その他さまざまのゲテものがにぎやかに並んで客を呼ぶのだから、ばかににぎやかで、縁日をひやかして歩くのがうきうきするほど楽しいふんいきをかもしました。市内の人たちは、買い物はこの日まで延ばしてやってくるほど。

町かどに演歌師が人を集めたのもこのころだった。カスリの着物にハカマをはいて、もの悲しいバイオリンの音と鼻にかかった歌声が人がきを越えて流れた。一冊十銭か二十銭の薄っ

ぺらな歌の本を売るのが目的で、歌のあいまには、気のきいたシャレを飛ばして笑わせた。あの演歌師の歌う節まわし、あれはいまの森繁調と思えばだいたい当たっている。

その楽しい夜市も戦争に吹きとばされ、復活したのは昭和二十五年からであった。

戦争は竹町のスズラン灯の鉄柱も、天幕張りのアーケードの鉄骨も、供出という名で取りあげてしまったが、そのスズラン灯が戦後竹町に復活して、胸の中に灯がともったような思いがしたのも二十五年の夜市の日。そのときの新聞記事は、その感激を次のように書いている。

「午後八時半、人がきにかこまれた上田市長の引っぱるクス玉による点火をあいずに、パツと光る総工費五十万円也の五十個のスズラン灯。各町ごとに飾られたアーチ式ネオンサインは折りからの月光と和して赤青黄とすばらしい美しきに輝き、まあきれいな」と思わずもらす感嘆の声……」

## あの店の店

明治から大正にかけて、竹町筋で店を張っていた店で、いまに残っている店は、ほんの数軒にすぎない。

あのころの竹町の店を思い起こしてみると、一丁目では入り口左かどに小手川雑貨店があり小林骨とう店や糸園洋品部が並んでいた。そのほか岩尾はきもの店や西海堂印房、児玉はんもの屋という仕立て屋、荒巻紋書き屋などがあった。小林骨とう店は、いま二丁目で衣料品店として繁盛している。小手川商店

は三丁目の西かどに小じんまり残っている。一丁目右側は日進堂文具店や磯辺茶店、明視堂、玉泉堂印房、西かどに讃岐屋と呼ぶ中尾薬店があった。玉泉堂は製版工場となって現在荷揚町にある。明視堂はいまも一丁目に残っている。

二丁目の左側には、一丸（のちの一丸デパート）や甲斐商品館、その他兎玉屋という洋品店や奥田洋服店、宝文館楽器店など、右側には森田靴店や園田糸店、村田こうもり傘店、三文字屋などがあったがこうもり傘店のあたりにのちに大分銀行が建ち、戦後は焼けあとに手を入れて衣料品店となった。

いまは都市計画でなくなつたが、現在のアサヒ靴店のところが南北にぬける道路で、右に曲がるとさくら町左に曲がると室町、この室町には思い出の多い人がたくさんあろう。信濃屋にはソバ食いに学生どもが二階に集まつた。ここでストライキなどよからぬ謀議も生まれたらしい。牛肉すき焼き屋「おじゅんの店」も人気があった。さくら町は料亭新京楼がここに生まれ、そのあとがサクラマチクラブになった。

なにかにつけて室町、さくら町は記憶から消えない町だが、いまは正直なところどこにあったか見当もつかない。

三丁目は、左側に岡田屋、万屋の宿屋がならび、刃物屋という名のあらゆるもの屋もあった。現在の丸三のところには亀屋という陶器店があった。右側には勧工場が魅力のある存在だった。勧工場はいまでいうなら名店街といったようなもの。一丸が考えだした店で、常に先端をゆこうとする一丸の積極性が現われた一つだ。大正の末に電車通りに他の人が勧工場を作ったが、これは竹町のそれとは内容も違うし魅力にも乏しかった。

一丸が竹町二丁目にデパートをつくるとき思い出話を、先代の故伍兵衛さんが次のように話してくれたことがある。

「百貨店は十万以上の人口の都市でなければなりたないといわれる。当時大分市は六万だったから冒険だという人が多かった。それで私は大分県地図を広げて、大分市を中心にコンパスで大きな円を描いてみせた。この範囲をとくにすればいいじゃないかってね」

## 奇人ユウケンさん

竹町も四丁目になると大きな店がずらりと並んでいた。当時の竹町はこのあたりを中心に、西新町と電車通りからの客を受けとめていた。右側には佐渡屋、森百の大きな呉服屋が間口をひろげ、布屋金物店もどっしりかまえていた。左側は甲斐書店が大分の本屋の先端をゆき、主人の治平さんは町長を勤めるなど、はぶりをきかせていたもの。

そして四丁目筋の半ばを占める八百屋旅館の大きな格子作りが長々と続いて、その次が小倉屋という大きな油屋だったが、これは明治時代に姿を消して、その一部が人力車のタテ場になっていた。甲斐書店と八百屋旅館にはさまれて古物商の「ユウケンさんの店」があった。ユウケンさんは竹町の奇人で、そのおもしろい商売ぶりはのちのちまで語り草になっている。

五十銭ぐらいの品物なら、一円五十銭ぐらいにふきかける。客もそれを承知で値ぎり倒す。値ぎるのも、まからんががんばるのも、楽しんでやっているようなものだ。客が求める品物は、

どんなものでも無いといったためしはない。第二倉庫、または第三倉庫に行つて持つてこいと店の者にいつける。店の者は裏口から、近所の店に駆けこんで、そろえてくるのだった。

羽織を求める客があった。「へい、羽織なら良いのがありません」と店の奥にすつこみ、持ち出して来たものを見たら、今の今までユウケンさんが着ていたものだった。

当時こどもたちに歌われた文句にこんながある。「宿屋は八百屋で 書物屋は甲斐のとなりのユウケンさん 負けちよかおいでと出てまねく」。

五丁目は右側に唐津屋という時計屋、三津屋ばかり（度量衡）店などがあり、かし福という料理屋があったがつぶれて、つる屋という呉服屋となり、これも明治末につぶれて西新町から菊川漆器店が進出してきた。左側は間口の広い文具店の後藤屋、井本菓子屋、床屋などが並んでいた。

それから西新町となるのだが、五丁目のきれいなあたりを通称「門口」または「出口」といつていたという。藩政時代は西新町は堀で、それにかかった橋のたもとが城下町に出入りする人を検問する番所となっていた。正しくは笠和口というのだが、東からの出入り口の米屋町の番所（塩九升口）を門口といったのにたいして、西の番所を出口といったのだろう。

竹町の四丁目と五丁目の間を南北につらぬいている道筋は、北に曲がる道が戦後なくなった。ここは紺屋町、寺町、今在家通りと続いて堀川町に通じていた。南側の笠和町筋はフンドーキンの裏の忘れられた寂しい町となったがかるうじて存在している。笠和町は、大分の地をひっくりくるめて笠和郷といっていた。

ずいぶん古い昔の地名がここにわずかに名をとどめている由緒ある町名だ。この笠和町に笠和天神という神社があった。またここには明治、大正の大分経済界を牛耳った長野善五郎さんの、屋号を塩屋という大きな造り酒屋があり。「萬長」という酒を出していた。

## 竹町っ子

竹町に生まれ、竹町に育ったほんとうの竹町っ子はまったく少なくなつた。

八百屋旅館の永松健一さん、布屋金物店の河野清一さん、刃物屋というあら物屋をしていた河野常一さん、いずれも現在は店はなくなっているが健在。現在四丁目でおもちゃ屋をしている土井良チヨさんも竹町っ子、ずっと若くなるが一丸の当主伍兵衛さんも竹町生まれ。こどものころから竹町の飯をくい、明治、大正、昭和三代の竹町の盛衰の中に暮らした阿南洋服店の阿南嘉助さんも、竹町生まれではないが竹町っ子というべきか。この人たちの若い時代、明治から大正初年の竹町は、のんきなものだった。「夕方になるとそれぞれ店の前の縁台に腰かけたりしゃがんだりして、互いに大声でおらびあって世間話をしたもの」だそうだ。

そんな世間話のうわさにのぼった人々のことも、時の流れの縮図である。

大分に出てくると必ず八百屋旅館に泊まった日出の金山王、成清博愛さんが、大分県で初めての自家用車乗りつけ、竹町っ



子の目を見張らせたのも遠い話。「あの車が八千円じゃそうな」とうわさもとんだ。

大分中学の野球草創時代に活躍した奥川元市さんや佐藤定雄さん（竹町亀屋）三ヶ尻喜六さん（南大分青表問屋）らが卒業後大分実業野球団を創立したが資金がない。成清さんに寄付してもらおうということになった。そこで八百屋旅館の永松健一さんが、成清さんがきたら電話で知らせてやろうと約束、待機していると「きた」との電話、それつとばかり代表数人がかけつけて頼んだら、即座に百円出してくれた。当時の百円は大きな金額だった。

明治の末、県議会議長になった木下淳太郎さん（現知事のおとうさん）も八百屋旅館が常宿で、安心院町から二人引きの人力車でやってきて議会の開会中ここに泊まっていたが、木下さんが竹町を通るときの、その堂々とした姿は「たいしたものだった」そうだ。

この木下淳太郎さんには、ちよつとつやっぱい話があつて竹町すずめの口をにぎわした。木下さんが旅館にはいると「そら一松がくるぞ」と商店のデッチもおかみさんも表から目をはなさない。一松は当時、大分で一流をうたわれた売れっ子芸者で、木下さんが大分滞在中、ほとんど付きつきりで周辺の世話をしていたという。

日露戦争中、大久保県知事の夫人が、毎日竹町を通って日赤にかよった。包帯巻きの奉仕だったらしいが、そのすぐく美人の夫人が、数歩あとにつつましく従う女中をつれて、すうっと通りすぎると、店の者は表にとび出してその後ろ姿を見送った。

【改訂履歴】

二〇〇七年一月十五日

正 大正末年の竹町二丁目入り口

誤 大正初年の竹町二丁目入り口



オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたく願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「大分今昔」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

## デジタルブック版「大分今昔」 第二章 ●竹町かいわい

2008年1月15日改訂1版発行

筆者 渡辺 克己

挿絵 田中 昇（着色：佐藤 克治）

編集 大分合同新聞社

制作 川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

〒870-8605 大分市府内町3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内

© 大分合同新聞社

**著者略歴◇渡辺克己**  
 大分県大分市佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退職。昭和二十七年から同四十二年まで大分市教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。  
 郷土史を研究し「大分今昔」「豊後のまがい物散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」「豊後の武将と合戦」「ふるさとの野の仏たち」等の著書。